こんやの光

歸命の巻

前篇

祝新年……一
志……二
礼拝……三
反対なる好一対の両偉人……六
帰命と念佛……八
念佛……一三
念佛に安心と起行……一四
起行の念佛……二〇

後篇

世界観……二三
厭離穢土欣求浄土……二六
成道……二〇
宇宙精神を如来蔵性と名づく……三一
法の如々……三四
本より末に流る……三五
如来の実体……三八
宇宙現象は鏡面の影像……四二

祝新年

無量光の聖名を稱へて新年を祝し候。

語に一年の計は一月にありと。一月の元始より本年一ケ年を有爲に時間を使用すべきやう心かけ候やうに望ましく候。

現今すべてに亘りて改造の聲、盛んに聞へます。

改造の中、最も根本たるは、國民精神の改造にて候。世の人を見るに、人生の根底に横たはる、絶對大靈の光を知見せず、只だ心を外面にのみ注ぎて、また眞實の自己を自覺せざるものゝみなるは、全く吾人宗教家が道の爲めに忠實ならざる所のいたす處と、彌よ〳〵慚愧に不耐る處なり。

子が今、學につとむる將來道に立ちて世に大光明を宣傳すべき自覺教人覺の準備に勤勉すべく是望まし候。

志

手をとりて共にすゝまむみひかりの
みねいかばかりたかくありとも

教祖釋尊は無上の道心を發して其志節の清きこと皓々たる月よりも清くまた無上の眞理をさとらんとの願望は朝日ののぼるよりは熾なりし。ついに大悟して宇宙の眞理を發顯なされた。佛の子たるものは、志は釋尊のそれと同じきやうになくてはならぬ。いやすゝめよきよきみちを。

禮拜

禮拜は人間から神に對する宗教である。

禮拜は靈的交通、崇敬、感謝、讃美、の中に心靈を發露する。

禮拜は神と人との間に至誠的一致を計る。

禮拜は精神が本源に遡る心靈の最（　）行爲である。

禮拜は全心をこめて至誠心から發する精神なり。

禮拜は人の心情の最も奥深き秘密までも知見したまふ神に捧ぐる至誠なり。是禮拜となる。

如來は常に我等を求めたまふ。

至誠と深心と欲望とによりて。

禮拜は人生の全體に對する一大使命を齎らす。

禮拜は人生を爽快にし、蘇生せしむ。

禮拜によつて萬事面目を新にす。

禮拜せぬ人は實ることのできる果を獲ることできぬ。彼は新き光明を得て、悅ばしい生活を送ること能はず。心靈の泉は涸れてしまふ。これを滿す高尙な源が彼にない。眞の禮拜は生命の水の源に導いて新鮮な歡喜を以て彼に光りを與へるのである。また同胞に頒ち得べき生命と悅樂とをもつてをる。

禮拜は靈的氣力を增進する。人格が神の人格と接觸する。發電氣に觸れて電線が電力を傳へるように、神との接觸によつて心靈は心靈の力、智慧、法愛を授けらる。最高の奉仕に耐る力をもつて派遣さるるのである。我等はミオヤに受けたる靈性の氣力を備へてをる。この氣力を最も力强くせんには日々に新たに生るゝ禮拜の力。

禮拜は人を日々に新にする力の源。

人はミオヤと交りて、天性を完うせんが爲に生れた。人の本性はミオヤと同じく兩者の間には牽引力がある。ミオヤは常に我等を照鑑したまふ。經に我は行道と不行道とを知つて度すべきに從つて度すと。

我禮する時、我は人として潔きものとなる。禮する時淸淨光によつて淸めらる。

禮拜はミオヤと親近することである。心の中に、子が親と交る如く、心靈は禮拜の中にミオヤと交る。

子の喜びは父と俱にをること。禮は天父と俱に居るを感せしむ。孤獨寂寞の境遇にも神と俱に居ることを知る。我獨り居るに非らずと感ぜしむるのである。

我はミオヤの慈悲の面に接すとの想ひ程靈なる樂みはない。

人は常に頻繁に交る人と肖似る性を有つて居る。屢々禮拜する時はミオヤと交る。ミオヤと生活する時間が長ければ、ミオヤに肖る。

禮拜する時人はミオヤの聖本願に近づく。

禮拜は(神の)人生に與ふる奉仕の一部又人間の義務神の祝福。眞の義務は人の爲に爽快なる慰謝と、溫かい愛と、强固なる信仰、光輝ある希望と見識(とを齎す。)

反對なる好一對の兩偉人

達磨大師は禪那敎の元祖にて、弘法大師は密宗の始祖である。此兩祖の靈的人格としての價値は何れを甲とし何れを乙とは判じ難し。然れども兩祖の性格と云ふよりは寧ろ宗敎的性質の形氣が反對に現はれてをる。

弘法大師は、其性質としては、文に筆に、多方面に頭腦と靈腕とを以て、風雅も、神韻も、趣味も持つて居るし、性格の趣に非ざるなきやと思はるゝに拘はらず、密敎なる宗敎的形氣と云物は、最も眞面目で信仰的である。勿論密法は、眞面目なる信仰を以て、如律令的に、修法を爲ざれば効果はない。そこで弘法大師はまた八十八ヶ所の靈場を開き、佛菩薩を本尊として、專ら佛像崇拜的の信仰を以て自信し、人を敎へて信ぜしめた。其弘法大師の信仰の結晶は千餘年の今日世の老若の信者から弘法大師の石像また木像を安置して頻りに敬禮せらる。其信者は何れと云はゞ下層の階級に多數をしめて居れども弘法大師の像を佛の如くに尊崇して居る。

夫と反對に、達磨大師に至つては、弘法大師の如くに、尊像等を以て神を代表した る像等に敬禮することを許さず、自己是本來佛、何ぞ他佛を禮せんと、自ら諸佛を本尊として敬禮せざるのみならず、他人の佛菩薩に禮拜するをも叱呵す。「汝自佛を敬禮せずして何事ぞ他佛を拜す狂漢」と。恁の如き宗風の祖たる達磨大師の畫及像は崇拜の對象物と爲らず。實に是因果の理と云はんか、また聲に應ずる響とや云はん。達磨大師の畫及像は、崇敬的崇拜の對象とはならざれども、達磨大師は非常に以心傳心を宣傳し、また世に廣く法緣を結ばんとの意志强く、世界的に傳法せんとの志望よりして、天竺より起て、萬里の波濤を踏破りて、遠く支那に來れるは、廣く世に法緣を結ばんが爲なり。神的崇拜の風は自から採らざりしも、廣く世に緣を結ばんとの最も深き意志は、尙千餘年の今日に至るも亡びず。達磨の像と云はゞ、小兒の玩具にも、經

師屋の看板にも、また煙火入の根つけにも、種々の方面に用ひられてをる。是大師が世に廣く緣を結ばんとの、意志に報ひる所の自然の因果の然らしむる所ならんか。

弘法大師は能く佛を禮拜したる結果、また自分の形像も廣く世の衆多の爲に敬禮せられ、磨師は自から佛菩薩を敬禮せざりし故に、何人にも其遺像に對して敬禮せられず。然れども廣く玩弄せられてをる。奇なる哉。

歸命と念佛

歸命と念佛と云ふことに就て宗敎の眞理を說き示さん。南無の梵語を歸命と譯す。歸命の解釋に二義あり。歸本と歸依の中に歸依の義に就て歸命の義を明さん。歸依とは、衆生は心が無智無力なれば絕對大なる大威神者大慈愛者に歸依(トッグ)の義である。歸とは世の女子が夫にトッグと云ふ義。詩經に「桃の夭々たる此葉蓁々此女こゝに歸ぐ其家寶に宜しく」。一體女子は獨り家庭を成し子孫を成すことはできぬ。必ず男子にトッガねばならぬ。夫に歸ぎて初めて家庭を造り子女を擧けて家室をグハイ能く爲すものである。故に男子に嫁すことをトッグと云ふ。即ちトッックと云ふ義である。然して女子が男子に歸ぐに就ては最良の配偶者を選ばねばならぬ。若しも生涯の運命を一任する夫にして或は放蕩者或は無賴漢の如くならば又奸邪惡性漢に歸ぐときはいかに悲運の酸苦をなめなければならぬ。世には奸邪色魔の毒手にかゝりて惡魔に身を委ね竟には身を醜業婦に酷られまたは破鏡の悲運を招ぐに至る如きは概して女子の智惠なく一時の迷の爲に竟に生涯を誤るに至るは卽ち歸ぎ所を誤りたるの致す處である。是は一生六十年の損失なり。まして況や永遠の生命を一任する心靈の歸ぐべき宗敎上の歸命信賴すべき信仰の對象たる本尊(神)を選定するに於ては最も大事なり。

今佛敎には一面は一神敎、佗面は汎神敎なれば、一神敎の眞宗の如きは彌陀一佛の故に眞の本師本佛はなしと云ふ宗風なれば本尊を選定するの要なし。また汎神的の禪

天台等の如きは自己是佛なれば他佛を本尊とするの要はない。我國の如きは宗敎の敎不完全なるが故に迷信多く邪敎淫祠甚だ多し。又種々雜多の神を拜し何れの神が最高等なるまた眞理なるかを覺せず、實に愚人の淺間敷現世祈りの信仰、いかなる淫祠邪敎でも選ばざるに至る。それらの邪神魔鬼は衆生の心靈を完全に圓滿に成就せしむべきの神にあらず。然るに淺劣なる愚夫野人の信心の歸する處恰も愚なる女が色醜い爲に魅せられて生涯を誤るよりも甚し。是宗敎が信仰の對象たる歸ぐべき本尊を選ばなくてはならぬ所以である。然るに大乘佛敎に敎ふる所の信仰の本尊は最も勝れ最も完全なるもので、宇宙の眞理はもと一なれば眞理の主たる神格は唯一ならざるべからず。この唯一の本尊を敎祖は敎へ給へり。佛敎に十方三世の無量の諸佛を說き給へども、其中心本尊は無量壽如來なりと。經に「無量壽佛の威神光明最尊第一にして諸佛の光明及ぶこと能はざるところなり」と。而してまた彌陀は諸佛統攝の獨尊たるのみにあらず、無量の行願を以て一切衆生の爲に衆生靈性を成就せしむべき誓願あり。聖善導が一々誓願は衆生の爲なりと。故に衆生信仰の歸命信賴すべき尊を求めむと欲せば獨り阿彌陀佛に歸せよ。卽ち彌陀に歸げよ。彌陀のみ獨り無上の愛を以て衆生を攝受して衆生を我有として、我(衆生)を成就せしめ給ふ。

例せば女が夫に歸ぎ既に結婚するに及びては、獨身の當時とは異れり。また男も然り。獨身の折には縱令いかなる事を爲すも災を妻に及ぼす憂なきも既に結婚の後は若しも我身を過つた事を爲さば禍を妻に迄及ぼすとの懸念あるが如くすべての事に心の妻にかゝる故に女を稱してつまと云ふ。卽ち心の妻にかゝりあるの謂なり。妻もまた處女の時代とかはり夫は常に離すことのできぬ心の結べる配者なり。國語に背子また背と云ふ常に夫が背にあるの謂なり。彼の衣通姫の「我が背子が來べき宵なりさゝかにのくもの振舞こよひしるしも」と。我が夫君を背子と云ふの意にて結婚して後は心の妻に在の背にある如く、獨身の夫とは異りて義に於て二人同心の理である。心靈に於ても亦既に歸命の神格は唯一でなくてはならぬ。之を歸依佛といふ。佛に歸ぎて爾

後は餘の外道の神に歸せぬなり。是を儀式的に表せば、正しく心靈の歸結、即ち結婚式を歸敬式と云ふ。縱令儀式を以て歸敬の意を表せざるも正しく自己の信仰が唯一の神尊に歸して云何なる事情の下にも歸依信賴の心意が動かざるに至りまた他の宗教の爲に歸命の神尊を變更せざるに至れば正しく歸命の實を成したるなり。然る時は即ち心靈的に結婚したるなり。爾後は心の妻に如來は常に在ますなり。されば從來の無賴獨身の夫とは同じからず。神聖なる如來は心の奥宮に光明輝赫と輝けり。大慈悲の彌陀は慈悲の面を注ぎて永へに向ひ給へり。赫々たる威神の前には自から正肅ならざるを得ぬ。愛々たる慈愛の温容を想へば心の惱もまたは怒も和らぎて平和と歡喜とに滿されん。新く如來が常に心の妻にかゝる時は、自己の精神生活も理想も高尚になり向上の光明をも得るに至らむ。此れ聖靈なる如來との結婚、是彼が齎らし來る持參財產なり。我れ彼に歸ぐが故に彼は我と離れざるなり。我があなたの有なり。我は全く全幅を彼に献げて而して彼が我を容るゝことを悅ぶなり。我全部が彼の所有と爲る時は、彼は我有である。然れば、彼は常に心の妻にかゝりて捨てることができぬ。聖法然が「我はたゞ佛にいつかあふひ草心の妻にかけぬ日ぞなき」と。是道詠の意こそ、聖法然が如來の靈と結婚したる上の心理狀態なり。

念佛

念佛の念てふ文字は、人二心即ち二人相共したる心なり。念は念頭にかゝる、何か自分の外に或物が常に心にかゝること。例へば金に執心する人には常に念頭に金と云ふものが執して離れぬ。また一人の子に愛執する人の念頭には常に子を念ふてをる。然る時は自分の心の中に子と二人を爲してをる。人物若しくは財物とか何物か心に懸る物無き時は念頭になきなり。念頭に阿彌陀佛が在まして離れぬ樣に爲りしは即ち念佛佛おもひの心である。從來の明記して忘れざるを念と爲すと云ふは唯記憶の心理狀態の如くにして、感情的執意的になつて居らぬ故に、佛を念の心理としては未だ完か

らず。宗教心は只佛を記憶に存するのみならば未だ活た信仰と云ふに足らず。彌陀の絕對的人格に對して愛慕戀念して感情的に內心に活躍して暖溫なる活氣に血湧き、有難さに涙こぼれすべてに超て彌陀を愛樂して止まず。悲嘆に沈む折柄も彌陀を念ずる時は心の奥底より衝動する有難さに心氣一轉憤怒に耐えざる場合にも稱名によりて思ひ出づる慈悲の面影に接する時は却て己が到らざるを謝するに至る。念佛とは常に如來を憶念して離れざるの謂、一度絕對の人格者に結びて念ふ心に離たず憶念し愛慕して捨てること能はざるは念佛なり。二人の結びたる心が即ち念である。能念の心に所念の彌陀と一體心に結合したるの心が念なり。

念佛に安心と起行

安心とは安置心即ち心の安置をすること。自己の宗教の主とする處の己が歸ぐ所の神尊は唯一無二、獨りの神に歸ぎて二つとならべておかぬこと。例へば貞女兩夫に見えずてふ如く獨の神尊の外に併べて歸ぐべき神なきなり。獨一の神に心を安置ていかなる事情の下にも其歸命の心を變更せざるなり。命にかけて歸するなり。いかゞなれば宗教心の歸する處の主尊は宇宙唯一無二の眞理の源に在まして、いかなるものも變へることの能はざる尊靈に在ます實在者なればなり。

唯一の尊靈なる如來が滿腔の慈愛を以て我を愛したまふことを信ずる時は我も滿腔の愛を以て如來を愛念せざるを得ぬ。如來は絕對無限大威靈と大自在と大慈愛とより我らを愛し給ふ慈悲からして、いと麗はしき慈悲の面を表はして我を愛し給ふことを示したまふ。其慈悲の表現に對しては實に我等は愛慕戀念せざるを得ぬ。眞實に宇宙間唯一無二の靈的人格現に對しては我らは愛念せざるを得ぬ。宇宙全體の大靈より表現したる人格表現なれば其所現の身の大小に拘らず絕對の表現なり。この靈的表現の彌陀より外に自己の絕對的に歸命信愛するものはなし。斯の如來に全身全生命を献げて仕へ奉る程自己の希望なし。彌陀に歸ぎて餘念なき態が即ち是れ正しく自己の安心

決定なり。我全生命を獻げて彌陀に歸する所に我は既に是如來の所有なり。我既に如來の所有となる時はまた如來は卽ち是我有なり。眞實に彌陀を信愛して獻げたる我生命なり。彌陀を離れて我生命はなきものなり。故に云何なる事情の下にも自餘の神に信愛の念を移轉することなきなり。恰も貞婦が夫に對する情操が命にかけて夫に獻げたるよりは堅き彌陀に對する信愛の情操なり。

或る光明會員の內に標榜せらるゝ如き善女人あり年久しく彌陀に歸し念佛をつとむ。予は曾てこの婦人は最も情操の全き信仰家なりと想ひたりき。偶或人の說を聞くに某善女人は近頃或種の神を尊崇し信仰しをれりと。予は之を聞いて彼の善女人にして斯る迷信に惑はさるゝ如きは有ることなからむと或日某女人に對問し徐ろに問ふ。「或人の說によれば貴姉は近頃或る某神を信ずると聞けり、實に然るや。予は貴姉の如き堅固なる安心を立て唯一の彌陀を信奉する善女人にして斯くの如きの信仰に入るとは恐らくは然らざらんと。而し乍らまた何かの事情の爲に止を得ざる故ありて他の神を信ずるに至りしものなるか、願くは實を以て貴姉の信仰の狀態を聞かしめ給へよ」と。某女人答へて曰く「妾は彌陀に歸して他の神に仕へずまた他の敎會にも出席せしことなかりき」と。尙更に問ふて曰く「然し貴姉の安心願くは一大事の事なれば、如實に貴姉の安心を告白し給へよ。予は實に貴姉に滿腔の同情を以て或は萬止を得ざる爲に他の神を信じたのなれば實の如くに答へ給へよ。正直の頭に神宿る貴姉の正直なる處に神は感應し給ふべければなり」と問ければ女曰く「若し信仰の安心が未だ曾て決定せざりし時に他の神を信じたりしに、後彌陀に歸し奉ることを得たり。然るに若し舊來の神に對する信仰を廢する時は、其神の怒りに觸れて生命を奪はるゝと云ふ場合は云何に候や縱令生命を奪はるゝとも其神を信じてはならぬものに候や。生命には替へられぬ故に其神を信じても彌陀はゆるし給ふものにて候や」と、其女の問はれしにより予は答へて「其は彌陀に一任したる歸命の信仰が貴女に安心決定したる上は既に彌陀に歸したる身なれば、縱令舊來の信仰を廢したる爲に其神の怒に觸れて生命を

奪はるゝとも、そは彌陀に任したる上はいかに決心すべきやは貴女自己の情操に存する處を以て決すべきものにて他人に問ふて後に決すべきものではない。其安心の決定は貴女の一心の決定である。若し例を以て云はゞ貴女が夫家に歸ぎたる後自己の運命は己に夫に任せ、而して夫は最も自分の理想の良人家柄と云ひすべてに渡りて自己の希望を滿足せしむるに足る家に嫁したることは實に自己は幸運なりと內心常に悅びたりしに、自己の夫は此良人の外に在る無しと決心したりしに、他にある男子が貴女にせまるに、我妻に爲て給へよ、若し我意を容れざりせば我は貴女を殺害せんと脅迫せらるゝ時は貴女其時に當つて云何に答ふるや。縱令生命を害せらるゝとも其仇し男に隨はざるべきや、將た生命には替へられぬ故に其男性にまた一身を歸任すべきに決定すべきや。貴女は此を自ら決定すること能はざる故に他の同意を得て後何れかに決すべきや云何。若し自己の情操に決定すること能はず、他人の同意の下に初めて決心すべき如くならば、斯の如き不貞の婦女、其情操の美として取るべき無きものなり。斯の如き貞操なきものは其に先だちて貴女の夫は貴女に離婚狀を與ふならん。肉體の結婚已に然り。況や心靈上の最神聖なる歸命の婚に於てをや。自ら反省したまへ。無智無力罪惡深重の凡夫、墮獄必定の身が遇難くして彌陀の本願に値ひ生命を獻げて大悲の救濟を仰ぐべき身、一度彌陀の容るゝ處と爲り身の幸を悅びゐたりしにあらずや。縱令生命を奪はるるとも決して不動の信念を立て全生命を歸獻したる上の情操に於て始めて眞實に麗はしき信が加はり、智慧もなく德もなく何一つ選取すべき無き身が彌陀の容るゝ處と成りしを意へば生命何の惜きことあらん。貴女が信仰の貞操いかゞ、情操は貴女自身の情操にあらずや。貴女の人格が彌陀に選取せらるゝや、捨てらるゝやは、貴女の彌陀に對する貞操の云何に存すにあらずや。また貴女が信仰の價値の眞と似とは貴女の情操の云何によつて決定すべきにあらずや。是彌陀に對する安心てふ心の安置おく處を確乎と決定すべきなり。貴女自から決せよ、是貴女が彌陀に對する貞操なるか不貞腐の安心なるか二つに分るゝ分岐點である。」斯くの如くに一度彌陀

に結婚したる爾降の情操と意志決定とはいかなる事情の下にも動揺せざるを安心決定したる念佛、即ち如來と二人一つになりし心なり。

起行の念佛

起行の念佛とは、前の安心を成立せしめんが爲に彌陀の恩寵を獲得し眞の信仰生活靈的生活に入らんとし、また靈的生命として活動行爲するの實行方面なり。眞實に彌陀と結合して我は彌陀の子彌陀は全く我父また我夫として、其大なる恩寵にまた光明に依つて自己の靈的生命が成長せらるゝ增上緣となる、光明が卽ち彌陀なり。彌陀の恩寵また光明を獲得するの方法は卽ち念佛なり。

彌陀より衆生の信仰心に與ふる靈妙なる力を光明と云ひ此光明を仰ぐ心を信念とす。光明とは例へば太陽の光の如し。如來の光明靈力を獲得する人の心を念佛と云ふ。もし光明を獲得して健全なる靈的生命を得むと欲せば先づ念佛三昧をつとむべし。

一心に念佛して心靈の生活に入れば、植物が始め種子より萠發して根莖を成し開華竟に實を結ぶが如くまた人の子が初め胎兒より胎內に發育せられ分娩出生し漸次に成長する如くに心靈的生活の生命が向上し發達す靈的生活を養成する起行を念佛起行と云ふ。一心念佛して向上する過程は彌陀の種子の播して種子に具有する性能が閉發して竟には諸佛と同じく無上正覺の結果を得る。此の種子を成就せしむる增上緣が卽ち念佛三昧である。斯の時に種子を播布するは卽ち安心である。卽ち如來を信樂して欲生の心を增長せしむるは起行念佛である。

佛を念じて佛の增上緣を被らんに初めは未だ信仰の如來の實在を認信するの意識もなく、胎內の子が(血)に養はるゝ如く、次に嬰兒の乳汁を呑む如くまた信念の中に靈的法悅等の妙味あるを覺えず、家庭に於て父母に誘はれる朝夕の禮拜式をつとめまた讃歌を歌ひ稱名を稱ふ如くまた如來の眞理を敎典によつて知り得る如く、念佛三昧及び禮拜讃歌等は信仰心を養ふ資糧なり。中に就て念佛三昧を正、中、正の妙行とす。

若し念佛三昧を以て靈的生命を長養するの妙行なりとするにあらざれば（我等が靈性の開發は得て望むべからず）念佛は太陽に向ふ如くに如來てふ心靈の太陽に向ひて向上す。如來は眞、善、美の極にして斯光明に向ひて念ずる時は信念の心も益々向上す。念々彌陀を念ずれば自己の心も漸くに彌陀に同化す。要する處は彌陀は萬德圓滿にして缺ることなき靈體にして、無量光明の發源體なれば、念ずる衆生の心の程度に隨つて不思議の力を得て信念漸く增進す。始めには信心喚起の增上緣と爲て念佛するに隨つて心靈喚起する起行と爲り、次に念佛三昧の如來の光明は信心開發の增上緣となる。次に念佛三昧は心靈的人格の果を結ぶに如來の光明が增上緣と爲る。念佛の起行として信仰の過程三階に渡りて（如來の光明は常にその增上緣となる。）

世界觀

淨土敎（衆生の業感より成れる）

淨敎は凡夫本位の敎の故に、敢て高遠甚深の理を語らず。現在吾人が受けたる現世界萬物は、悉く一切衆生煩惱と妄業の所感を、共同の力より造り出たる自然界である故に、斯の如く穢惡充滿諸苦惱多き世界の生は、煩惱や業のあらん限りは、善惡因果に由つて、流轉休むことなからん。

さればとて、如何に此因を以ていかに積聚するも、零に零を積むとも又零、如何に六道の生死の苦を厭ふも、自ら出離の力なき凡夫なり。

こゝに於て、過去久遠に大王ありて、佛法に於て大にさとる所あり。此苦界の人民等を救ふべき道を世自在王佛に求む。佛の敎に本づき大願を發し、無量の行業を以て萬善萬美の世界を感ず。惑業凡夫所感の娑婆を厭離して、報佛所感の淨土に超生して

成佛を期す。煩惱所感の穢土と萬行所感の淨土とは十萬億土の隔あり。

法相敎

一切諸法即ち世界萬物は、本、唯識のみにして、別に一法としてあることなし。一心から變現して、自然界の萬物となる。一切の主觀なる心相も、外界の客觀も、本、一心である。即ち一心の本體が、因緣力によて現じたる、因緣で成れる心識身心を我と偏計し、本來無なるを實有と執し、實我實法と執す。妄境を追て、心外に法を求め、迷を發し生死休まず。若外界の妄塵に惑るゝことの迷なる事を自覺して自己の內的大自觀に向つて、眞如本然の本心顯はれ來らば、識即ち大圓鏡智と顯れて、平等性等の智性が現じて見れば、從來の無明等の煩惱の眠が醒め、菩提となり、生死の夢醒めて、涅槃を證す。一心唯眠るアラヤの夢、覺めて鏡智の靈界現前。

天臺宗

萬法の本體、眞如即一心である。平等一理、自性を守らず、無明の緣に隨て、九界を變現す。一心　理に十界。十界に十如。五陰と、器と、衆生との三種の世間を具して、無明の緣に隨て、九界の三千と現はれ、一心無明等の煩惱の輕重に依て、地獄六道乃至菩薩の世界を變作す。

宇宙の本體は、本來平等、一理の眞如を自己の心に隨て、種々に造り自ら見る。本心は定相なく、空の如くに、因緣に隨つて地獄と天種々に變作す。變現即ち假、種々又假の故に種々變現す。性空にして、相が假、假にして空、空にして假、即ち中道なり。

理具佛三千末顯の衆生を憐れみ、已顯の能化の佛陀、隨類應機の佛身土を現し、凡聖同居の土に、隨類の佛身を方便、十地の菩薩の爲に、萬德高妙の佛、七寶莊嚴の報土に現す。無明の深淺に依て、感見不同。若し無明盡除すれば、佛の自境界四德寂照、理智冥合、法身獨了々。法身常寂光土に在して、身と心と土とは一體なり。なほ高樓甍を双べる大帝都の栖居は、美は美し、されども山門陬僻地に花笑鳥歌の自然の美な

きにあらず。彼淨土に入て十樂の園に遊ぶ時は、妙樂は言はずもがな、然も此自然界に在ても、圖音開來りて觀ずれば、四時代謝花開き花散る。花鳥風月、四時の好景、悉く是世間の相常住。花笑鳥歌、一一眞如實相。此活劇必ずしも喜劇をのみ奇とする勿れ。悲劇人情を感激す。世界此變化極りなき活舞臺、兒が靑年と變じ忽ちに一老と化す。春風駘蕩花匂ひ寒往暖來、一風千斤の値を感ず。千變萬化、此娑婆にして觀ずべし。淨土に至らば淨土にあつて。自然界にあらば自然の美に醉ひ、淨土に到らば淨土の快を恣にす。何ぞ快なる。

厭離穢土欣求淨土

一切衆生の煩惱業に依て感じ居る六道生死の穢土を厭離して法藏菩薩淸淨業感の報土に往生すると云ふに種々見解あり。

一方には現在此六道生死の世界は一初衆生同共所感にて根本的に衆生の業から實現せしものである。一方に法藏比丘無量の願行淸淨の業報より酬因感果の淨土は現に西方十萬億刹にあり。衆生阿彌の願力を信賴し念佛する時は此に死して彼に生す。彼土は全く現在の世界と宇宙根本的に各別なりとの解と、

又第二には宇宙の本體は本絕對にして(以下斷絕)

成道

キリスト

外キリストによれば、世界すべての人類は、其祖先が己に神に背き戒を破り、元罪を造れり。其子孫は悉く祖先の原罪を生れながらに受けたり。故に父なる神の坐せる樂園に歸るべき資格を失へり。神は愛を深くして罪に亡びたる人類を靈(　)せんが爲に子キリストを世に降して人類を罪より救ふべき(　)

キリストを信じて之に聖めらるるものは復活して神の國に遷ることを得。

カント

哲學者カントは、神の國は實踐理性には即ち實行の結果としては無かるべからず、而れども現在不完全なる世界より最幸福と最高德との完全なる神の國に達せんには無限の時間を要せざるべからず、と。

法相

此を佛敎の性相家に於て、無上佛果は大願大行實行の結果として成就すべき三身四智依正二報莊嚴淨佛國土は、三祇の劫を修行の後始めて達せらるべきものとす。

天台

天台には六卽位とし、一切衆生本來佛性を具有せり、此心に三諦妙理を具して不可思議これを理卽と云。上の理を名字の中に通達し一初法皆佛法を了知す。次に觀行、十乘觀を修し、兼行六度を觀行卽、四、相似卽、六根淸淨三界の見惑を斷じ、次の六信に三界思惑を斷じ後三品に習氣及界外塵沙を斷じ、無明の惑を伏し是內凡位、五分眞位卽十住十行十回向十地等覺四十一位の中に於て各一品無明を斷じ各一分中道の理を顯はす。並に八相成道度衆生普門示現益衆生と云分眞位、六究竟卽等覺一轉して妙覺に入、佛果圓滿斷證窮極。

華嚴

華嚴別敎一乘行位に二門、一次第行布門。因果次第進修證入の故に。二圓融相攝門、因果融攝無礙卽入の故に。行布を以ての故に經微塵劫。圓融を以ての故に一念速疾に佛果を證す。卽ち三生成佛の階級を立つ。見聞位、解行位、證入位なり。

佛敎天台華嚴の如き學說としては最も能く發達したるものと云はん。然れどもカントが謂ゆる天國は認識の實在に非ずして、彼は感情的執意的實在として取あつかふと。華天の如き自己心性の珠を磨き來る則は本來是佛と理性の滿足をこゝに得られんも、感情及執意の宗敎としては安心を他に求めざるべからず。

眞言

華天の如き自己心性開發の外に他に客體の恩寵を仰ぐことなし。

密家に至つては此と異り、本尊に歸依信賴して三密の相應を求む。秘藏寶鑰に守護國經を引て曰く、爾時釋迦牟尼佛言、秘密主我於無量劫中、修集如是波羅密多、至最後身、六年苦行、(　)とも未だ菩提を得て大ビルシャナと成こと得ざ(　)き。道場に座(　)とも、無量化佛、同聲告曰、善男子云何求等正覺、我白佛言、我是凡夫、未知求處、唯願慈悲、爲我解說し玉へ、是時、佛同告我言、善男子、諦聽、當爲汝說、汝今宜應當於鼻端、想月輪、於月輪中、作唵字觀、作此觀已、於後夜分、得成菩提、善男子、十方世界、如恒沙諸佛、不於月輪作唵字觀得成佛者、無有此處、何以故、唵字卽是一切法門、亦是八萬四千法門、寶炬關(　)、唵字は卽是ビルシャナの眞身、唵字卽是一切陀羅尼母、從此能生一切如來。

今日く通して宗敎は神に歸命信賴、神と融合致一を旨とせり。唵字は歸命信賴なり、如來に全身全幅を投して全然融合の相應を意味す。

宗敎意識が心情意志及び智力にも完全に得んと欲せば、華天の如く唯自己本覺の理を發見することを求むるのみにあらず、恁る知力冷索落寞たるよりは慈悲活力に富める大なる力に信賴せざれば溫暖と熱中を造る能はず。大我と融和するの妙樂を感じ、平和悅豫を求むる如き、自己全身全幅を投歸沒入する如き(以下斷絕)

宇宙精神を如來藏性と名づく

如來藏とは宇宙實體なり。人に精神あるが如く、宇宙精神あり、宇宙は活ける如來なり。

如來藏性は物心一如の理體なり。密家に金胎大日如來と二つに別ちたるは宇宙の地水火風空の物體の方面を胎藏界と名づけ、宇宙心を識大として之を金剛界と爲す。今

この物心二面を合して如來藏性と爲す。

宇宙全體は生ける如來にして即ち心靈態なり。

此宇宙精神に一切智と一切能との二屬性を具す。

之を體相用の三大と爲す。宇宙即ち生ける如來は心靈態にして相を一切知とし即ち絶對觀念態にして、用は一切能力即ち絶對意志なり。然れば如來は宇宙全體にして智慧と能力とある心靈態なり。

宇宙心靈の象は一切智慧、之を四種に分ち、即ち法身如來の四智と云ふ。

一、圓智。絶對觀念態また絶對寫象態、此絶對寫象態が二面となり、主觀客觀的觀念とす。主觀的觀念は心象にして、客觀觀念は物象なり。物心二象はこの觀念態によりて現じたるものとす。若し此觀念態の理性なからんか、宇宙物象心象あることなし。例へば天に太陽なき時、明あることなきが如し。物心二象相となるべきなし。

二、平等理性智。宇宙精神に理性を以て全體の萬物を統一し攝理することなり。宇宙の一方面なる自然界を見るも、主觀客觀は此一大理系によりて統攝せらるゝ故に、萬物は時間に空間に能く天則秩序を調整す。

萬物は擾々紛々たるが如くに見ゆれども、其元因結果の、時間的に秩序を整へ、因緣相關、空間的に秩序の亂れざる、之を整ふる理性なかるべからず。之を絶對性智と名く。

三、察智。宇宙如來藏性に包含する內容豐饒無盡にして之を開示す。現に宇宙萬物が新陳代謝し、日月星宿天にかゝり、地に萬物草木百花爛漫として麗しさを呈し芳しきを流がすもまた藏性が自然界に開示したる態なり。

例へば天才の腦髓より詩文音樂繪畫等が湧出すが如く、宇宙に胎藏に含蓄せる主觀客觀の內容無盡の德藏より開示せる宇宙現象の物心二象なり。

四、作智。宇宙精神の作智態が主觀の感官機能を變作し、また、客觀の物象分子とし、色聲香味等の物象とまた物象を感覺すべき機能をも一大覺智が感覺の能所となるべき理性ありて之をなさしむるものとす。

法の如々

宇宙一切の萬有は悉く一眞如の現顯である。楞嚴經に、衆生の眼は視耳は聽き鼻は嗅ぎ舌は味ひ身は觸覺すの如き、すべての感覺を爲すも、心の本體も、實は妙眞如性の隨緣の作用であると。また外界に現はれたるすべての色も聲も香も味も寒熱の氣も、其本は妙眞如性が物質の相と現じたるものである。また天地萬物を構造する處の地水火風空の五大即ち物質すべての物體も悉く同一妙眞如性を體とす。眞如隨緣の顯現である。天に日月星辰の輝光あり、地に一切生物の起伏隱顯するあり。何かは眞如の現はれならざらん。一色一香無非中道。花の紅柳の綠、悉く眞如の現相である。然らば即ち我人の眼は見え耳は聽く悉く眞如が吾人の身心と現はれたる上の現象に過ぎぬ。

本より末に流る

宇宙萬有生起の一大原因を原ねて法身如來藏心なりとすれば、法身の常恒の流行が即ち法則となる。即ち其形式は天則秩序として時間空間の形式に因果律的に萬有を形成す。內容に無盡の性德を具備し、一切智と一切能との性能によりて、萬有を生起するに秩序を整へ而して生活々動せしむ。常恒隨緣循業の建設的事業暫くも休止することなし。

藏心は一方は常恒不變、不生不滅にして、一面は常恒の活動。藏性の不變と隨緣の活動とは、一體にして常に寂靜にして全體活動なり。此常恒の活動、建設的衝合の方を心生滅門と名づく。藏性の活動的方面を阿賴耶識と名づく。能く一切の法を包藏しまた萬有を生起す。即ち藏性の全體心より一轉して個々心識と變ず。此衆生心に覺と不覺と二義あり。覺者は此心が念を離れて個人心が即ち全體心と一致することを得て

即ち一體となる。之を如來平等法身と名づく。不覺は、本、全體心を體としながら之を覺らず、全體より活動の一波瀾が、生滅の方に、個人心識となりて、不覺に心は動きて生起するを無明業相と云ふ。不覺に動ずれば苦あり、故に本平等の全體より個心と爲るが故に、差別が生じて彼我と顯れ、能見の相となり、能見の主觀立つ時は、三に境界相なる客觀が現前す。これがアラヤ識の見分相分にして、惑より業を起し、個々別々なれば個人に三界六道を造り、一切衆生の共同業感より世界を感出す。(個に生住異滅展轉して休まず、世界は成住壞空。)現に吾人が現在此身は個身は自業自得なり。三界は別法なし、唯覺一心作と。

是内的生活心識の方面より生起の因緣を明す。

本より色心不二、心を離れたる色の生起なきなれども、形氣の方面より萬有生起を說明せば、謂く藏性即ち宇宙一大元氣自然法によりて天體を造化す。即ち物的の一大元素の力が運動し、自然に氣の相合するものと、離散するの二氣、即ち陰陽の二氣となりて益陰動陽動し、今日の陽動は精氣となり、陰動は天體の星宿となりて、自然の勢力各自の業力能く遂げたるものは、天體の太陽の如くに成じ、太陽の業力よりまた地球を發展し、地球は太陽より分れたる瓦斯體なりしが熱の冷却したる或程度に於て光線電氣との因緣力によりて生物組織を生起し、之を元形質と名づく。炭酸窒水の化合物精密なる分子なり。此元形質が細胞となり有機物となり、原始生物より動植物の二面に向て進化し、原始動物が無數の時間に於て內的外的の因緣力によりて數々の階段を經て高等動物と化し、つひに原始人類となり、高度の生物には其種族を遺傳するに元形質に自己と同じき資質を遺傳し、即ち人類の元祖より連綿として乃祖乃父展轉して此身を生起す。

內的生活の心識と外的生活の形氣の質とは色即是心、本不離の關係を有せるものなれども、外觀上より研究すると外部より觀察したるとの二面に過ぎず。然るに宗敎は本自己の心識解脫靈化得道を目的とするが故に、內的生活の心識の方面に重きを置き

て研究するものとす。生物の進化が低度の生物より高等に進化するに、內的心識の向上が外部身體組織の發達にして內的生活上の向上によらずして外的進化の理あることなし。故に此二者離るべからざる關係を有せり。

如來の實體

哲學に謂ゆる宇宙の實體が即ち如來の法體である。自然界と心靈界、即ち生死界と涅槃界と、其現象の上には相反對なるも、其が統一的存在なる實體は同一でなくてはならぬ。哲學の實體に就ては古來種々の學說あり。或は實在を意味する說あり。或は事物の形式を抽象して本質を實體と立つる說あり。又普通の屬性や偶性と區別して其實質を實體と爲るものあり。また實體とは現象の諸の性質の奧に在る本體にして是萬有の原因であると云ふ說あり。神學にては實體を以て神性を表はし、人格的差別を超絕するものとす。プラトーはイデーが萬物の實體にして緣起の原因なりとす。デカルトは他に依らずして自ら存在するものを實體と名づく即ち神であると。スピノザは自身に依て存在無限永久必然性なる實體即ち神であると。ライプニッツは實體は活動し得る存在即ち力であると。カントは實體とは經驗より來らず純粹概念である、又存在の最後の主體なりと。ヘーゲルは絕對的にして單純なる否定態であると、又偶性の總體を實體とす。または實體は雜多の諸の性質を總合せる基礎である。または實體とは現象の種々に變化するものに反して、內的不變性あるを云ふ。今佛敎哲學に云ふ處の眞如は自已は本不變性であると共に、常住の活動より物心依正の一切の現象と變現するを隨緣と名づけ、種々に變化するとも其本性は不變、大海水と波との喩の如し、之を隨緣にして不變、不變にして隨緣すとは即ち之なり。

○

實體論に古來物心二元論あり。又唯心論、唯物論あり。二元論者は、今現に現象の萬物に、有形の物質と無形の心質とある故に、其本因なる實體に於ても物と心との二

元ならざる可からずと云ふ說を二元論とす。

唯物論者の主張する處によれば、現象には物質と心質とに分たるれども、其宇宙を構造する本質は物質の原子また電子がありて、永遠不滅にして其勢力は常恒存在なので、其が自然律によりて萬物を造る。人間の精神の如きも腦髓神經を構造する細胞の作用に過ぎぬ。故に精神なるものは物質の副產物に外ならぬ。永恒の實在は物質の原子であると說いて居る。

唯心論即ち觀念論の說によれば、心生ずれば一切の法生じ心滅すれば一切の法滅す。宇宙萬象は即ち天地萬物の色相は、唯心の變現に外ならずと主張す。

また唯理論者あり謂く、物質が如何に精明を極むとも、物質より精神の生ずる理ありとは思はれない、亦心質より物質に變現すべきとも思はれぬ。故に無形の心と有形の物質とは現象には異れども、其本因なる實體は、物心不二の理體なるべきものとす。即ち宇宙を包含する處の普徧的概念は變化極りなき中に不變の理法存在し、不變の本體より其活動より隨緣して一切萬物を變現す。故に之が統一的存在を眞如と云ふ理體であると。眞如は本物心不二の眞理の體なれども、活動の主體なる故に心眞如と名く、即ち物心一如の心である。

○

本質の實在は或は人間の意識の境を超越したる不可知的のものである。人の意識に現はれ來る者は自己の心を客體化して觀て居るので實在ではない。實在は不可知的であると主張する學者あり。

觀念的實在論者は謂く、實在は觀念的のものにて可知的である。吾人の觀念と實在とは全く一體である。絕對なる同一觀念態を、外に現はるれば客觀界即ち物質なので、內觀すれば主觀界なので一體の兩面の現に外ならぬと說くあり。

今は實在は吾人の直觀と同一本質にして、不斷の活動も吾人の精神に比すべく、實在の本質は吾人の直觀と質が同一なることは、深く眞如觀に入る人の證明する處、故

に起信論に、眞如は言語同斷にて思慮も及ばざる處、然れども眞如觀にて證入するものに相應す、とは是である。

宇宙現象は鏡面の影像

宇宙心靈の象相たる一大觀念態は、宇宙に周偏せる心靈的明鏡なり。森然たる色心二象は、一大觀念の差別的現象にして、鏡に映現せる影像の如し。

空間時間の形式により、因果律に一切の物心二象は顯現し、起伏隱顯變轉極りなく現出するものは、絕對意志の全動力によりて萬有中に遍在するによる。

華嚴五敎章に、實性隨緣して淨染と成ると雖も、恒に自性の淨を失はず。猶し明鏡が染淨を現ずるも鏡の明淨を失はざる如し。否明淨を失はざるのみにあらず、却て染淨を現ずるが爲に、鏡の明淨なるを現す。

若しは客觀若は主觀、一大觀念態を離れて、一切の物心二象となるべき本質あることなし。然れば吾人の諸官能によりて認識する現象と云ふも、鏡智を離れたるものにあらず。然れども吾人が生理機能なる官能によりて感ずる處の萬象を以て、鏡智の本質なりと云ふべからず。吾人は一大觀念を根底とするも、生理機能の爲に着色せられて、自己の本能によりて境界を把住す。譬へば青眼鏡を以て觀る時は萬物悉く青色を呈する如く、吾人は實に宇宙の中一微塵なり。一太陽系に屬する惑星なる地球に微小なる此生理機制の身、かゝる生理機能はそれに應ずる器械的の官能を以て窺ふ處の天地と云ひ萬物と云ひ、いかに無限なる觀念態を自己の觀念とするも、生理の機能は器械的に制限す。管を以て天を窺ふの觀なき能はず。吾人が感能によりて知覺することは有限なること免るべからず。無限の觀念も機能の爲に制限せらる。

吾人が感官は環の內面を觀る如し。眼を外に放つて見るは却て隘に向ふものなり。若し器械的の機能によらずして直觀する時は、外面に向て無限に對して觀ずるなり。機能によりて認識を殊にすることを明さんが爲に唯識論は一水四見の喩あり。即ち同

一の水に對して人は之を水と見る。水族の類は之を氣の如くに感ず。餓鬼の爲には熱河と認む。天人には瑠璃寶地と感ずと。

今また之に例して、

進化說による同一の生物が劣等動物より最高等なる人類に至るまでの階級に隨て、物に對する認識相同じからず。最も莊嚴を極めたる高閣に在て、人は其莊嚴の美を認むれども、其の中に在て蠅は其美に對していかん。また人にあらざれば人間界を認むる能はず。他の劣等動物は人と同居するも其感覺を異にす。同じ地球に處して人は人界を認め犬は犬の世界とす。すべての其階級に隨て感見を異にす。同一觀念を各自己の內的生活とするも、生理の機能は其功を異にす。これによりて唯識論の唯心觀おこる。

佛陀は人類をして一大觀念と契合せしめん爲に敎を示せり。

昭和四年一月十五日印刷
同　二十日發行
年七冊制は廢止
年拾貳冊　貳圓（郵稅共）

編輯兼發行人　山崎辨成

印刷人　東京市小石川區餌訪町五五　小林七太郎　電話小石川一四九五

發行所　東京市小石川區水道端二ノ四四　ミオヤのひかり社　振替東京六六八五一番

前號辨榮生者の御生家を訪ふ記事中植字正誤

頁	行	誤植	訂正
三	七	安孫子、	我孫子
六	八	鷲、野谷	鷲野谷
一一	二	祖父、しん	祖母、しん
一一	六	殊にに、死去前	殊に御、死去前
一二	二	德川家康、	德川家康公
一四	五	溫厚者、	溫厚淸實、
一四	八	七十歲頃	七十歲頃迄、
一九	六	蟬　蜻蛉	蟬や蜻蛉
二〇	一〇	高橋良平	高橋量平
二〇	一一	長谷川五郎	長谷部、谷五郎
二二	二	解決、決定	解釋、決定
二三	一一	明、治、三年一月沒	昭、和、三年一月沒
二五	一〇	僧の名、	僧の繪、
二八	七	留置所に	留置所にて、
三一	二	十二歲の時御、見拂	十二歲の御時、見拂
三一	五	考へ考へられる	考へられる
三二	二	生家、	生活、
三四	八	高橋良平	高橋量平
三六	四	（註二）	（註一）
三八	二	（註三）	（註二）
三九	二	爲ぬに	爲めに
三九	七	或他の人には、決心	或他の人に御、決心
四五	一〇	實に、	實は
四六	一	正午前は、御生家	正午前御生家

以上

頁	行	誤植	訂正
三九	一〇	御生家、	御生活、
三九	一一	以後聖者の	以後の、聖者の
四〇	一〇	秋元自衞門	秋元四、郎右、エ門
四二	二	他の人々なら經驗出來ぬ	他の人々は自ら經驗出來ぬ
四二	六	此五重相傳なら終れて後	此五重相傳を終へられて後
四二	七	鶴、發、良善	鶴卷良善
四二	八	五十位の女	三十位の女
四四	二	少くとも歸省	少くとも御、歸省
四四	六	お積りであつたにとな	お積りであつたことを
四四	八	聖者は、遷化	聖者御、遷化
四五	九	聖者御自身の仕事	聖者御自身の御、事